



Title	イブン・サッラージュ『al-' Uṣūl fī an-Naḥw』から みたアラブ文法論争
Author(s)	岡崎, 英樹
Citation	アラブ・イスラム研究. 2009, 7, p. 31-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イブン・サッラージュ 『al-'Uṣūl fī an-Naḥw』 からみたアラブ文法論争

岡崎 英樹*

Arab Grammatical Controversies in light of Ibn as-Sarrāğ's *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*

It is an undisputed fact that the foundation of the Arab grammatical tradition was established in the eighth and ninth centuries by grammarians such as Sībawayhi, al-Mubarrad, and their contemporaries in Baṣra and Baḡdād. However, it was not until the tenth century that the standard usage of grammatical terms and the classification and organization of categories of grammatical items were accomplished and took root among grammarians. Although it is believed that significant progress was made owing to the controversies between the so-called Baṣran and Kūfan grammatical schools before the latter half of the ninth century, most of the treatises on these controversies were written by Baṣran scholars in the period after the tenth century. As a result, we have little information at hand about the Kūfan position on each point of the arguments between the two schools. The aim of this paper is to investigate the actual circumstances surrounding the grammatical schools by examining the Kūfan views in *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*, the tenth grammatical work of Ibn as-Sarrāğ, one of al-Mubarrad's disciples.

1. はじめに

アラブ伝統文法の発展にとって、10世紀前半という時代は大きな節目であった。8世紀から9世紀にかけて、スィーバワイヒ(Sībawayhi)、ムバッラド(al-Mubarrad)といった文法家による、いわゆる「標準的」かつ「正統的」な文法の基礎が作られたのは事実であるが、文法用語や、文法書・学習書の章立てや、提示・説明の定まった方法といった面においては、10世紀以降に飛躍的に発展したと言える。イブン・サッラージュ(Ibn as-Sarrāğ)、ザッジャージー(az-Zağğāğī)、イブン・ジンニー(Ibn Ġinnī)らの時代以降は、同一の概念に対して同一の用語を使用する文法書が徐々に増え、章立てや説明方法といった点においても、さらに均一なものとして受け継がれるようになってゆく。

このような「正統的」な文法は、「バスラ学派」と「クーファ学派」の学者たちの間で繰り広げられた論争を経て発展したと伝えられるが、その実態を同時代の文献で直接確認することはできない。特に、9世紀以前の「クーファ学派」の文法的見解のうち、我々が知ることのできるものの多くは、後の時代の文献による情報に基づいている。

本稿では、9世紀以前の「学派」間の意見対立や、文法家の間に存在した見解の相違の実態がどのようなものであったかを明らかにするために、ムバッラドの弟子で

* 四天王寺大学 講師

ある、10世紀初頭のイブン・サッラージュ著 *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* (以下、'Uṣūl) にみられるクーファ学派に関する記述を整理し、主として、文法用語の使われ方と、クーファ学派に対するスタンスといった観点から、「文法学派」をめぐる状況について考察する。

2. 文法学派の歴史的信憑性

アラブの文法家たちは、伝統的に「バスラ」「クーファ」「バグダード」などの「学派」に分類されてきた。文法家列伝の一つである、10世紀のズバイディー(*az-Zubaydī*), *Ṭabaqāt* においても「バスラ」と「クーファ」は明確に分けられている。それぞれの学派の文法に対する基本的姿勢や方法論的特徴を示す伝統的な視点として、「キヤース(*qiyās*)」と「サマーア(*samā'*)」があり、ヴァイル(*G. Weil*)は“Analogist”と“Anomalist”という表現を各学派に当てる¹⁾。キヤースを重視するバスラ学派と、サマーアを重視するクーファ学派の違いを、端的に表している逸話に、ザッジャーグが *Mağālis al-'Ulamā'* で記しているものがある。その中で、ムバッラドはサアラブ(*Ta'lab*)にこのような言葉を投げかける。「思慮深くない田舎女性の言葉を鵜呑みにし、クルアーンやイジュマーをないがしろにするべからず。lā yu-trak kitāb-u l-lāh-i wa-'iğmā'-u l-'arab-i li-qawl-i 'a'rābiyy-at-in ra'nā'-a.」²⁾ また、ダイフ(*Ṣ. Ḍayf*)は、クーファ学派を特徴づける最も重要なものとして、「遊牧民から定住民までのあらゆるアラブ人が伝える詩歌や言葉遣いから広範囲に言語資料を得る」点を指摘する³⁾。また、いわゆる「スズメバチ論争(*al-mas'ala az-zunbūriyya*)」が様々な形をとって諸々の文献で伝えられるが、これらの中にも、サマーアを重視するクーファ学派の姿勢が描かれている⁴⁾。

以上のような伝統的な二分法に対し、ヴァイルのように、歴史的信憑性を疑う、あるいは「学派」の存在を否定する立場もみられる。ヴァイルの主張の根幹をなすものは、一つには、「9世紀末より前に、バスラ学派もクーファ学派も存在しない」という点であり、もう一つは、「学派はムバッラドより後の世代による作り話(*eine literarische Fiktion*)」⁵⁾という点に集約される。ヴァイルの説に関しては、これまで多くの学者が見解を表明してきているが、概ねこの考えに近い学者として、カーター(*M.G. Carter*)やベルナルド(*M. Bernards*)らがいる。一方、ヴァイルの考えに批判的な立場を取っている学者にフェルシュテーフ(*C.H.M. Fersteegh*)らがいる⁶⁾。

このように、歴史的信憑性が疑われるような議論が起こる背景には、8世紀から9世紀にかけての1次資料の乏しさがある。クーファ学派の理論的な枠組に基づいた単

1) Weil 1913, 44 ff.; Goldziher 1994, 35.

2) *az-Zağğāgī, Mağālis*, 95

3) Ḍayf 1968, 159.

4) *az-Zağğāgī, Mağālis*, 9-10; *az-Zubaydī, Ṭabaqāt*, 68; *Ibn al-'Anbārī, 'Inṣāf* I, 702-6; 池田1970, 1972, 1982; 内記 1968.

5) Weil 1913, 59.

6) Carter 1973, 1990, 1994, 1999, 2000; Bernards 1997; Talmon 1985, 1986, 2003; *as-Sāmarrā'i* 1987, Fleisch 1957; Owens 1990, 1991; Baalbaki 1981; Versteegh 1977, 1987, 1995.

一の文法書は現存しないため⁷⁾、クーファ学派の文法的立場を総合的に構築するには、ファッラー(al-Farrā'), *Ma'ānī al-Qur'ān*、サアラブ、*Maḡālīs Ta'lab*、イブン・シュカイル (Ibn Šuqayr), *al-Ġumal fi an-Naḥw* など、文法書以外のものに見られる断片的な情報に頼らざるを得ない。たとえば、10世紀初頭、ザッジャージと文法論争を繰り広げたとされる、「クーファ学派」のアブー・バクル・イブン・アンバーリー('Abū Bakr Ibn al-'Anbārī)⁸⁾についても、2次資料の中では頻繁に引用されるけれども、彼の文法的見解を包括的に直接伝える資料は残されていない。

このようなわけで、8世紀から10世紀にかけての文法学の状況は、バスラ側の限られた資料を中心にした形でしか検証できないのが実情である。そもそも、文法家列伝の類にしても、「学派」をめぐる記述は一樣ではなく、それぞれかなり異なる部分が見られる。特にバスラ、クーファ学派以外に関する記述では、ズバイディーでは「エジプト」「カイラワーン」「アル・アンダルス」の枠組みを設定するが、イブン・ナディーム(Ibn an-Nadīm)ではこれらがみられず、折衷派としての「バグダード」という設定がみられる⁹⁾。「バスラ」「クーファ」という根幹部分についても、ある文法家がどの学派に属するのかという記述さえも、矛盾する部分がしばしば見られる。たとえば、イブン・シュカイルに関し、ザッジャージの *'Idāḥ* では、「クーファの学者」としている部分と、「バスラ学派」とであると紹介する部分とが混在する¹⁰⁾。しかも、ザッジャージ自身、イブン・シュカイルに直接教を受けたことを明記しているのである。

文法家列伝やその他の資料で、個人レベルでの意見の対立が記述されているが、それを学派の対立に一般化するのは避けるべきである。スィーバワイヒの *Kitāb* が主としてムバッラドの手によって権威あるものとして評価されるまでは、ムバッラド自身、スィーバワイヒの見解の多くに異論を唱えていた。イブン・ジンニーの *Ḥaṣā'iṣ* には、ムバッラドがスィーバワイヒに対する当初の反論を悔やんだことを伝えるイブン・サッラージュの言葉がみられる¹¹⁾。また、ムバッラド以前の時代には、アフファシュ(al-'Aḥfaš)、ジャルミー(al-Ġarmī)、マーズィニー(al-Māzinī)という「バスラ」学派の文法家によって、スィーバワイヒの *Kitāb* が批判を受けるということが通常行われていた。

「学派」間の対立を象徴的に描く「スズメバチ論争」についても、再検証を要すると考えられる。イブン・ナディームは、サアラブが出所であるとするが¹²⁾、少なくともサアラブの *Maḡālīs* ではこのテーマに関わる一切の言及がない。この論争に関する最も古い記録が何であるかを特定することは難しいが、現在確認できるもの

7) この点については、異論もあるが、Ḥalaf al-'aḥmar (d.796) の *Muqaddima* の真偽が明らかになっていない以上、このように言える。

8) 'Abū Muḥammad Qāsim al-'Anbārī の息子。サアラブに文法学を学ぶ。Ṭabaqāt, 153-4; Fihrist, 112; Nuzha, 231-7; 'Inbāh III, 201-8; Buḡya I, 212-4; Flügel 1862, 168-72. なお、12世紀のアブー・バラカート・イブン・アンバーリーとは区別される。

9) Fihrist, 115.

10) az-Zaḡḡāḡī, 'Idāḥ, 79, 81; Versteegh 1995, 122, 124.

11) Ḥaṣā'iṣ I, 206; III, 287.

12) Fihrist, 76.

としては、ザッジャージ、*Mağālis al-‘Ulamā’* に記されているものが比較的古いものであろう。タルモン(R. Talmon)は、文法論争以外の周辺の筋立ての展開は決まってスィーバワイヒに有利な形になっていることなどから、スィーバワイヒがいかに不当に扱われたかを強調するため、意図的な手直しが加えられたのでは、との見解を示している¹³⁾。

3. ‘Uṣūl にられるバスラの要素とクーファ的要素

9世紀以降は、多くの文法家がバグダードに住むようになり、居住地・活動地から学派を分類することは不可能になっていく。イブン・サッラージュ(d.928)も出生地は不明であるが、居住地はバグダードであった。師弟関係からも、バスラ学派に属すと言うことができ、‘Uṣūl の中でも、バスラ学派の学者を指して ‘aṣḥāb-u-nā と呼ぶ部分が散見される。また、10世紀のズバイディーやイブン・ナディームの文法家列伝でも明確にバスラ学派に分類され、その後12～13世紀にかけてのイブン・アンバーリー(‘Abū al-Barakāt Ibn al-‘Anbārī)、ヤーカート(Yāqūt)、キフティー(al-Qifṭī)、イブン・ハッリカーン(Ibn Ḥallikān)、15世紀のスューティー(as-Suyūṭī)らによる文法家列伝においても受け継がれていった¹⁴⁾。

イブン・サッラージュは、ムバッラドの最年少の弟子で、自身の弟子にはザッジャージ、スィーラーフィー(as-Sīrāfī)、ファーリスィー(al-Fārisī)、ルンマーニー(ar-Rummānī)らがいる。しかし、ザッジャージとの関係を示す資料は多くない。スューティーの *Buḡya* には、イブン・アッサッラージュは「若くして死んだ」との記述がある¹⁵⁾。生年は不明であるが、仮に50歳で死んだとしても、878年生まれという計算になる。師のムバッラドが死んだ898年には、イブン・サッラージュはおよそ20歳ということになり、「最年少の弟子」ということと矛盾しない。しかし、弟子のザッジャージが860年又は870年生まれであるので、ザッジャージが8歳又は18歳年上ということになってしまう。

文法家列伝の中には、イブン・サッラージュに対し、「アフファシュやクーファの人々の見解を支持し、多くの点でバスラの人々の考えと異なっていた」との記述もみられる¹⁶⁾。このことから、方法論的、文法的見解という側面からは、必ずしも純粹にバスラ学派であると評価されているわけではない。

イブン・サッラージュの代表的な著作の一つ、*al-‘Uṣūl fī an-Nahw* は、ムバッラドの *al-Muqtaḍab* とザッジャージの *al-Ġumal* の間を埋める文法書として極めて重要なものである。また、それ以前に書かれた、ファッラーの *Ma‘ānī al-Qur‘ān* やサアラブの *Mağālis* などを除けば、「クーファ学派」の文法論を豊富に伝える最古の文法書に位置づけられる。

13) Talmon 1986, 145.

14) *Ṭabaqāt*, 112-4; *Fihrist*, 92-3; *Nuzha*, 220; *Mu‘ğam* V, 341-3; *‘Inbāh* III, 145-9; *Wafayāt* IV, 339-40; *Buḡya* I, 109-10.

15) *Buḡya* I, 110.

16) *Mu‘ğam* V, 341.

4. 「学派」についての言及

イブン・サッラージュの 'Uṣūl を、バスラ・クーファ学派の論争といった観点から分析するために重要な視点として、「学派」に相当する語が用いられるか、あるいは、どのように表現されるかという点がある。「学派」を意味するアラビア語としては、一般的に “madḥab” “madrasa” などがあげられる。「文法学派」の意味で “madrasa” が用いられるようになったきっかけについては、カーターが Flügel (1862) に関連付けているのに対し、ベルナルは、al-Maḥzūmī (1958) が最初に用いたと考えている¹⁷⁾。いずれにしても、“madrasa” が「文法学派」の意味で一般的に用いられるようになったのは、それほど古い時代ではない。

また、「学派」という言葉の定義自体も曖昧さを含みながら用いられてきており、一様に同じ意味で用いられているとは限らない。出身地、活動拠点、師弟関係といった社会的側面に力点を置く場合もあるし、文法現象に対する分析、正誤判断の基準などといった方法論に力点を置く場合もあり得る。以下では、暫定的に、「師弟関係」と「方法論」の2つの条件が満たされて初めて同じ「学派」に属するという扱いで論を進めたいと思う。

文法学派としての「バスラ」「クーファ」に関する言及が確認できる、最古の文献をどのように認定するかという点についても、議論が分かれるところである。単に、なんらかの形で言及があるかどうかという観点からすれば、文法家列伝では9世紀末のティルミズィー(at-Tirmidī), *Maḥṣūṭ farīd nafīs 'an Marātib an-Naḥwiyyīn*、文法書では8世紀末スィーバワイヒの *Kitāb* における言及が、確認できる最古のものということになるであろう¹⁸⁾。しかし、ヴァイルが指摘した「集団として」¹⁹⁾という観点や、バアルバックキー(R. Baalbaki)が指摘した「文法的(grammatical)側面」²⁰⁾、つまりキラーアに関わるものではないという意味での統語的側面での言及かどうかということらを考慮すれば、*Kitāb* における記述のみによって「バスラ学派」「クーファ学派」が存在し、スィーバワイヒがそれを認識していたという結論を導き出すことはできない。バアルバックキーは、文法的側面でクーファを集散的に言及している最も古い文献は、ムバッラドの *al-Muqtaḍab* であり、バスラに関する言及としては、イブン・スィッキート(Ibn as-Sikkīt)であると結論付けている²¹⁾。

いずれにせよ、9世紀までの文献においては、学派による見解の相違を確認できるだけの資料が乏しいのに比べて、10世紀以降の文献では、バスラ、クーファに関する言及数が急増するということは間違いない。サアラブの *Maḡālis* と比べ、ザッジャージュ(az-Zaḡḡāḡ)の *Ma'ānī al-Qur'ān* には両学派に対する言及がはるかに多いことはオーウェンズ(J. Owens)が指摘するとおりである²²⁾。

17) Carter 2000, 264; Bernards 1997, 11.

18) Bernards 1997, 12, 14.

19) Weil 1913, 57.

20) Baalbaki 1981, 2.

21) Baalbaki 1981, 7. なお、バスラの言及について Weil は、ムバッラドの *al-Kāmil* が最古であると考えていた。Weil 1913, 57.

22) Owens 1990, 206-7; 1991, 236.

各文献における「バスラ」「クーファ」の言及という観点からの、バアルバック、オーウェンズ、ベルナルドらによるこれまでの研究²³⁾では、イブン・サッラージュの '*Uṣūl*」における言及数は触れられていない。'*Uṣūl*」に関する詳細な分析は、これらの先行研究から欠落した部分を補うという意味で重要であると考えられる。

'*Uṣūl*」において、「学派」がどのように記述されているかを検証するために、同書での "*maḏhab*" という語の使い方を拾ってみた。その結果、*maḏhab* *Sībawayhi* (14箇所)、*maḏhab* '*Abī al-ʿAbbās* (5箇所)、*maḏhab* *al-Kisāʾī* (1箇所)、*maḏhab* *al-Farrāʾ* (1箇所)など文法家個人の名がつく場合の他、*maḏhab* *al-kūfiyyīn* (3箇所)、*maḏhab* *al-baṣriyyīn* (2箇所)のように「バスラ」「クーファ」という地名に関連付けられた文法家集団を意味する名詞複数がつく例が見つかった。しかし、どれをみても、「学派」などとは解釈できない。以下にあげる2つの例をみても、"*maḏhab*" はともに「方法」「流儀」「考え方」「意見」などといった意味である。

「スィーバワイヒが言ったことに従って… (中略)。曰く、この言葉はファッラーとその一派の考えである。...*ʿalā mā qāl-a Sībawayhi. qāl-a: wa-hāda l-qawl-u maḏhab-u l-Farrāʾ-i wa-ʾaṣḥāb-i-hi. ('Uṣūl* III, 320)」

「マーズィニーとアブー・アッバース²⁴⁾は、それを前に置くことは可能であるとする。スィーバワイヒは、これは不可であると言っており、クーファの人々もこの点に関してはスィーバワイヒの意見と同じである。...*ḡāz-a taqdīm-u-hū ʿinda l-Māziniyy-i wa-ʾAbī l-ʿAbbās-i, wa-kān-a Sībawayhi lā yu-ḡiz-u-hū wa-l-kūfiyy-ūna fī dālika ʿalā maḏhab-i Sībawayhi fī-hi. ('Uṣūl* I, 223)」

このように、'*Uṣūl*」においては、文法家の集団について「学派 *maḏhab*」といった明確な呼称によって表現されていないことが確認できた。一方で、表現としては曖昧でありながらも、集団としての「バスラの人々」「クーファの人々」という認識を持っていたことは間違いなく、それぞれが文法的見解を異にしていることについての記述は多くみとれる。なお、「バスラの人々」については2種類の表現が用いられている。*baṣriyyūn* が38箇所で用いられているのに加え、*ahl al-baṣra* が2箇所みられる。同様に、「クーファの人々」については *kūfiyyūn* (62箇所)、*ahl al-kūfa* (2箇所)の2つの表現で示される。数行の間にこれら2つの表現が用いられるところがあり²⁵⁾、厳密な使い分けはなされていないものと考えられる。

5. 文法学派と文法用語の違い

「バスラ学派」と「クーファ学派」とでは一部の文法用語が異なっていることは、

23) Baalbaki 1981, Owens 1990, Bernards 1997, 2005.

24) ムバッドを指す。

25) '*Uṣūl* II, 236.

しばしば指摘されてきた。「属格 ḡarr (B), ḥafḍ (K)」(B = Baṣra / K = Kūfa)の他、「説明の対格 tamyīz (B), tafsīr (K)」動名詞 maṣḍar (B), 'ism al-fi'l (K)」否定 nafi (B), ḡaḥḍ (K)」対照対格 ṣarf (B), ḥilāf (K)」などが代表的なものである²⁶⁾。

異なる文法用語が存在することは、それぞれの学派が実在したという伝統的な立場を支える重要な根拠の一つとなる。一方で、8世紀から10世紀にかけて文法用語が徐々に定まってゆく、いわば過渡期の中で、バスラ、クーファの文法用語を明確に分けることが妥当なのかという疑問も生じる。

まず、「属格」を意味する ḡarr と ḥafḍ のうち、一般的に ḥafḍ はクーファ学派の用語とされるが、実際には、バスラ学派のムバッラド、ザッジャージュ、ザッジャージュらの著作においても頻繁に用いられている。フェルシュテーフのように、バスラとクーファの用語を厳密に分けて、ザッジャージュによるクーファ学派の用語 ḥafḍ の使用を、例外的なものとして説明する立場もあるが²⁷⁾、10世紀半ばまでの多くのバスラ学派の学者は ḡarr と ḥafḍ の両方を使用していることも事実である²⁸⁾。また、ザッジャージュの *Maḡālis* には、ハリール・ブヌ・アフマドがアスマイーに ḡarr と ḥafḍ の違いについて尋ねたという話が収められているが、正誤判断にまで踏み込んだ言及はみられないし、用語の違いと各学派との関連付けもみられない²⁹⁾。同様に「クーファ学派」の用語であるとされる tafsīr についても、ザッジャージュによる使用例が確認できる³⁰⁾。

ṣarf と ḥilāf については、「共に」を意味するワーウ(al-wāw al-ma'īyya)の後の名詞対格又は動詞未完了形接続法」を指す用語である³¹⁾。この二つの用語は、同義語であると言えるのか、それとも、二つの「学派」に別々の文法記述の方法論が存在したのかということが問題とされてきた。カーターは、命名法の違いであって、方法論の違いではないということを強調するが、これとは対照的に、フェルシュテーフは、用語の違いだけでなく、方法論の違いであるという立場をとる³²⁾。

6. 'Uṣūl の文法用語にみる「クーファ的」要素

イブン・サッラージュが用いる「クーファ学派」の文法用語には、ḥafḍ, tafsīr, mufasssīr, makniyy, kināya, maḡhūl, ḥurūf an-nasaq, mā lam yusamma fā'il-u-hu, ḡaḥḍ, ṣifa があることはファトリー (A. Ḥ. al-Fatḥī) やユースフ (M. I. Yūsuf) が指摘している³³⁾。以下では、これらに加え、他の文法用語についても、実際の使用状況をまとめてみたい。

まず、イブン・サッラージュ自身が、複数存在する文法用語について、「バスラ」

26) al-Maḥzūmī 1958, 306-16; Versteegh 1993, 12; Carter 2000, 266.

27) Versteegh 1995, 132, 205, 238.

28) al-Mubarrad, *Muqtaḍab* II, 155; az-Zaḡḡāḡ, *Mā yanṣarif*, 59, 161; az-Zaḡḡāḡ, *Ġumal*, 72.

29) az-Zaḡḡāḡ, *Maḡālis*, 193.

30) az-Zaḡḡāḡ, *Ġumal*, 77.

31) 内記1968, 72は「対照対格」と呼ぶ。

32) Carter 1973, 293-304; Versteegh 1993, 10-1.

33) al-Fatḥī 1985, 21; Yūsuf 2000, 534ff.

と「クーファ」に関連付けているものとしては、以下 (1) (2) の2か所のみである。

(1) faṣl と ‘imād (II, 125)

(2) laḡw と ṣifa nāqiṣa (I, 205)

また、「クーファ」の用語であるとしているが、「バスラ」の用語であるとは言明していないものに、(3)から(6)がある。

(3) taqrīb (I, 152) ³⁴⁾

(4) mutarḡim, takrīr (II, 189)

(5) maḡhūl (I, 182, 189, 232) ³⁵⁾

(6) ṣarf (II, 189) ³⁶⁾

これとは逆に、「バスラ」の用語であるとしているが、「クーファ」の用語であるとは言明していないものに(7)がある。

(7) ‘aṭf al-bayān (I, 368-9)

また、「バスラ」との関連付けに加え、「キサーイー」「ファッラー」という具体的な文法家の名をあげ、各々が異なる用語を使うと指摘しているものに(8)がある。

(8) zurūf と ṣifa と maḡhāl (I, 204) ³⁷⁾

これらのことから、イブン・サッラージュは「バスラ」と「クーファ」とで異なる文法用語が存在することを認識していたのは間違いない。ただし、用語の違いを「学派」と関連付けている箇所は以上のように限られていることや、「クーファ的」な用語を排除するような態度が見られないことは注目すべきであろう。多くの場合、「バスラ」と「クーファ」で異なるとされる文法用語は、*‘Uṣūl* においては無秩序に混交しており、徹底して一方の用語を使おうとする姿勢が欠如していると言える。

このことを明確に示す例として、文法用語 *tamyīz* の使われ方がある。*tamyīz* は他の多くの同義語と混在して用いられ、文脈からみても、一定の法則に従って使い分けがなされているわけではない。例えば、「*tamyīz* の章³⁸⁾」では、*tamyīz* 11回、*tafsīr* 3回、*abyīn* 3回、*mumayyiz* 3回、*mufasssir* 2回という5種類もの同義語が用いられている³⁹⁾。また、他の箇所では、*tamyīz* の倒置に関連するわずか20行の説明の中で、*tamyīz* 3回、*mufasssir* 4回、*tafsīr* 2回が混在している例もみられる⁴⁰⁾。一般に、*tafsīr* や *mufasssir* は「クーファ学派」の用語であるとされるが、*‘Uṣūl* では特定の学派や文法家との関

34) cf. al-Farrā’, *Ma‘ānī* I, 8; Ta‘lab, *Maḡālīs*, 427.

35) バスラ学派は *ḍamīr aṣ-ṣa’n*, *al-qīṣṣa*, *al-ḥadīṭ* などを用いるとされ、*‘Uṣūl* にも *al-qīṣṣa* I, 183, *al-qīṣṣa*, *al-ḥadīṭ* I, 86などの用例がある。しかし、クーファの用語であるとしつつも *maḡhūl* が多用される。また、「inna-hū qām-a bakr-un のような *maḡhūla* と呼ばれる *hā’* (I, 257)」のように、クーファとの関連づけをしていない箇所もある。

36) *ḥilāf* については *‘Uṣūl* II, 188で用いられているが、バスラとの関連は明言されず。

37) イブン・アンバーリーは、「彼ら（クーファの人々）は *ṣarf* を *maḡhāl* と呼ぶが、中には *ṣifa* と呼ぶ者もいる (*Inṣāf* I, 51)」と記述しており、文法家の名には触れていない。

38) *‘Uṣūl* I, 223-61.

39) 章の始めの p.7 までは例が集中するが、p.229 以降は扱うテーマが変わっており、ほとんどこれらの文法用語は見いだせない。おおむね、近接する部分では、同じ用語を使う傾向がみられる。p.237 の *tafsīr* や p.251 の *mufasssir* は普通名詞であり、数に入れていない。

40) *‘Uṣūl* II, 229-30.

連付けはなされていない。

ムバッラドやザッジャージーが「属格」の意で *ḥafḍ* を用いることはすでに述べたとおりであるが、イブン・サッラージュも例外ではないことを確認することができた。なお、同じ意味であるという断り書きさえみられる⁴¹⁾。

これら以外にも、*ḍamīr* (人称代名詞) や *'ism al-fā'il* (能動分詞) の代わりに、それぞれ *makniyy* と *fī'l dā'im* という「クーファ学派」のものとされる用語の使用例も多くみられる。

以上のように、『*'Uṣūl*』には、各学派で異なるとされる文法用語が広い範囲にわたって混在していることが確認できた。10世紀の「バスラ学派」の代表的な文法家の一人であるイブン・サッラージュが、文法用語の使用に関しては、少なくとも「バスラ」のものを一貫して用いなかった理由はいくつか考えられる。一つは、彼に限ったことではないが、文法家たちの用語の使い方に起因するものである。多くの文法家の著作において、一つの概念に対し、複数の文法用語を場当たりの的に使う例が観察される。二つ目に、彼自身の文法に対する客観的で中立的な姿勢に起因するものが考えられる。『*'Uṣūl*』では一貫して、冷静な記述が目立ち、多くの文法家の見解を紹介または採用している。同時にこれは、様々な用語が取り入れられることにもつながる。三つ目に、文法学の発展段階に関連するものが考えられる。つまり、学派によって文法用語が整然と分かれていたというより、当時は、依然として一つの概念に対し複数の用語が併存し、用語の厳密な意味での使い分けが確定していなかったといえるであろう。また、例えば、「同族目的語」を意味する用語 *al-maṣ'ūl al-muṭlaq* は、『*'Uṣūl*』で用いられることは確認できるが⁴²⁾、それ以前の時代の *Kitāb* や *al-Muqtaḍab* では用いられていない。このように、10世紀以前までは、新たな文法用語が使われ出したり、重複していたものが徐々に統一されていった時代であったといえる。『*'Uṣūl*』に「バスラ」と「クーファ」の多くの文法用語が混在しているという事実は、8世紀から10世紀にアラブ文法の標準的なものが形成されていく過程で、学者によって異なっていた用語が、10世紀前半においてもなお、確定していなかったことの証しではないだろうか。

7. 「クーファの人々」に対する立場

『*'Uṣūl*』には「バスラの人々 (*baṣriyyūn* / *'ahl al-baṣra*)」「クーファの人々 (*kūfiyyūn* / *'ahl al-kūfa*)」といった表現によって、多くの文法的見解の相違が記されている。バスラ、クーファの人々に対する言及数は、10世紀中頃までの文献の中でも群を抜いていると言える。このことから、「学派」という表現は用いないものの、「バスラ」「クーファ」それぞれに属する文法家を集合として認識していたことや、異なる見解が文法家個人レベルにとどまるものではないことは読み取れる。しかし、『*'Uṣūl*』は、全体的に言って、客観的で冷静な立場での記述を特徴とする。彼は、概ね「バスラ」的な見解を支持しているわけであるが、「クーファ」の見解を一貫して否定するわけでも

41) *wa-qawl-i: ḡarr-un wa-ḥafḍ-un bi-ma'nan wāhid-in*. 『*'Uṣūl*』 I, 408.

42) 『*'Uṣūl*』 I, 159 ff.

ない。「クーファ」側の意見について、正誤の判断には踏み込まず、自分の立場を留保している部分も少なくない。

また、文法家たちが「バスラ」「クーファ」という二つの学派に分かれて意見が対立していたという構図からは説明できない部分も見られる。以下の(1a)の能動分詞 'ākil-an を後置した(1b)について、キサーイーは可とし、ファッラーは不可であるとする。また、ムバッラドは可としたと語られていると述べる。このことは、「クーファ学派」のキサーイーと「バスラ学派」のムバッラドが同じ意見であり、「クーファ学派」の中で意見が対立していたことを意味する。

(1a) ḡalas-a 'abd-u l-lāh-i 'ākil-an ṭa'ām-a-ka. (I, 221)

(1b) ḡalas-a 'abd-u l-lāh-i ṭa'ām-a-ka 'ākil-an.

また、別の個所では、イブン・サッラージュが「真正イダーファ('idāfa ṣaḥīḥa)」と呼ぶものに関連して「バスラ学派」とファッラーが同じ意見で、キサーイーと対立している⁴³⁾。次の(2a) (2b) (3a) (3b)の第1語に定冠詞(al-'alif wa-l-lām)をつけることをキサーイーは可とするが、「バスラ学派」やファッラーは不可であるとする。

(2a) ar-raṭl-u z-zayt-a. (I, 321)

(2b) ar-raṭl-u z-zayt-i.

(3a) al-ḥams-at-u l-'aṭwāb-a.

(3b) al-ḥams-at-u l-'aṭwāb-i.

さらに、別の部分では、タムイズの前置(taqdīm at-tamyīz)に関して、「バスラ学派」の中で意見が対立している。(4b)のように名詞対格 dirham-an を数詞の前に置くことについて、マーズィニー、ムバッラドは可とするがスィーバワイヒは不可とする。クーファの人々もスィーバワイヒの見解に従い不可とする。これに関して、イブン・サッラージュは別の個所で不可であるとの立場を表明している⁴⁴⁾。

(4a) 'iṣr-ūna dirham-an. (I, 223-4)

(4b) dirham-an 'iṣr-ūna.

上記のマーズィニーが可とする点については、例文は異なるものの、イブン・ワッラード(Ibn Wallād)の記述でも確認できる⁴⁵⁾。

(5) ṣaḥm-an tafaqqa'-tu.

(6) 'araq-an taṣabbab-tu.

イブン・サッラージュが、クーファの人々、キサーイー、ファッラーに同調している部分として、キサーイーが語ったとされる以下の点がある⁴⁶⁾。

(7) qaḍw-a r-raḡul-u. (I, 115)

43) スィーバワイヒは「疑似イダーファ('idāfa ḡayr ḥaḡiqiyya)」に関する議論の中でこの問題を扱っている。Kitāb I, 70-88.

44) 'Uṣūl II, 229.

45) 'Intiṣār, 85-6.

46) Maḡālis al-'Ulamā', 46; Ṣarḥ al-Mufaṣṣal VII, 129; Ham' III, 29.

(8) da'w-a r-rağul-u.

以上のような記述がみられるという事実は、'Uṣūl がバスラ、クーファの対立を際立たせることだけを目的とするものではないことの証しと言えよう。

'Uṣūl には、サアラブに対する言及が6箇所あるが、呼称が一定しないのに加え⁴⁷⁾、サアラブが誰かと意見が対立している個所がみられないことも注目に値する。自らの師ムバッラドと、その論敵であるサアラブとの間に起こったと伝えられている様々な議論についてさえ触れていないのである。また、クーファ学派であるサアラブに敵対的な部分が読み取れず、むしろ好意的であるとも受け取れる。このことは、ムバッラドとサアラブとの間の論争が本当にあったのかさえ疑わしくなるような扱い方であると言えよう。

'Uṣūl にみられるこのような客観的で冷静であるとも言える姿勢と対照的なのが、同じ10世紀前半のザッジャージの 'Īdāh である。ザッジャージは、論敵であるアブー・バクル・イブン・アンバーリーの意見を批判するのみならず、個人攻撃にまで話しが展開するというように、感情的、又は政治的な部分が少なからず見られる⁴⁸⁾。

8. イブン・アンバーリー著 'Inṣāf と 'Uṣūl の対比

「バスラ学派」と「クーファ学派」の論争について包括的に記述しているものに、12世紀のアブー・バラカート・イブン・アンバーリーの 'Inṣāf があるが、9世紀、10世紀の文法学の状況をこの中に記されている「学派」対立といった視点のみから思い描くのは避けるべきであろう。

イブン・アンバーリー自身はバスラ学派を自認するにもかかわらず、121の争点のうち7つについてはクーファを支持したり、「バスラ」対「クーファ」の対立の構図が壊れ、同じ学派内の意見対立が際立ってしまう部分（クーファ学派の見解一致しバスラ学派4つの意見に分裂している例、ザッジャージュとクーファの見解が一致しムバッラドと対立している例、サアラブとクーファの見解が一致しファッラーと対立している例）なども散見される。バアルバッキーによれば対立意見のおよそ3分の1はファッラーの Ma'ānī al-Qur'ān で確認されるというが⁴⁹⁾、他の対立意見すべてがアラブ文法の初期の文献で確認されるわけではない。12世紀の 'Inṣāf の記述と、10世紀の 'Uṣūl とを対比させることによって、それぞれの争点が、10世紀以前のものであるのか、あるいはそれ以後の時代に加えられたものかなどを検証することが必要である。以下では、イブン・サッラージュが 'Uṣūl の中で、「バスラ」「クーファ」の意見対立をどの程度扱っているかをみるために、'Inṣāf と照らし合わせた結果の一部をあげる。

47) Ta'lab が3箇所、'Aḥmad ibn Yaḥyā が3箇所（うち1箇所は、raḥim-a-hū al-lāh-u の表現が添えられる）。'Uṣūl I, 324, 407; II, 202, 213, 221, 235.

48) 'Īdāh, 63.

49) Baalbaki 1981, 24.

'*Inṣāf* はそのタイトルが示す通り、学派間の対立そのものに焦点を当てているため、全体的な傾向は当然のことながら、'*Inṣāf* の方が学派の意見対立を詳細に扱っている。たとえば、'*Inṣāf* の争点1「'ism の語源⁵⁰⁾」、争点2「6つの名詞の格変化⁵¹⁾」などは、'*Inṣāf* では冒頭でとりあげるほどの、基本的で重要なテーマであるが、'*Uṣūl* では一切触れられていない。その他、争点14「ni'ma, bi'sa の品詞⁵²⁾」、争点28「maṣdar の起源⁵³⁾」などは、'*Uṣūl* では一般に「バスラ」のものであるとされる見解のみが記載され、「クーファ」の見解には触れていない。しかも、「バスラ」の見解であるとは明記されていない。つまり、これらの文法事項については、学派ごとに見解の対立があることが '*Uṣūl* からは読み取ることはできない。

反対に、'*Uṣūl* にも詳細な記述がみられる場合もある。争点31「作用語である動詞とハールの倒置⁵⁴⁾」などでは、'*Inṣāf* にも '*Uṣūl* にも詳細な記述がみられる。さらに、場合によっては、'*Uṣūl* の方が詳細な記述がみられることもある。文法用語 *zarf*, *ṣifa*, *maḥall* が各々、どの文法学者が用いるかという点で、'*Uṣūl* では具体的な文法家の名が挙げられているのに対し、'*Inṣāf* では、争点6「前置詞句に後続する名詞が主格をとる理由⁵⁵⁾」の中で、文法用語が3種類存在することに簡潔に触れるにとどまる。

しかし、上記のように '*Uṣūl* の方が詳細な記述をしているものは極めて限られており、全般的には '*Inṣāf* の方が学派の対立を詳細に記述している。また、'*Inṣāf* に記載がある121の争点のうち、'*Uṣūl* で確認できないものも多数にのぼる。ムバッラドの時代に活発な学派論争が交わされ、争点や各学派の主張が明確であったならば、'*Uṣūl* の中に、より画然とした学派ごとの見解が記されていることが期待されるのではないだろうか。また、'*Uṣūl* に記された文法的見解の違いの多くは、文法用語、正誤判断、末梢的用例に対する扱いが大部分を占め、'*Inṣāf* で記されているアラビア語の記述にとってより根本的な争点の多くについては言及されていないことも注目すべきである。

8世紀から9世紀にかけての、いわゆる「学派間対立」が、後の10世紀から12世紀にかけて、過去の対立を顧みる形でまとめられる過程で、より論点が明確になり、各々の文法家の見解も整理されていったことは想像に難くない。しかし、イブン・サッラージュの大著 '*Uṣūl* で採用されなかったにもかかわらず、その後12世紀までにどのような形でまとめられていったのかを考察するには、10世紀の他の文法家の著作に関しても検証する必要がある。

9. おわりに

10世紀の文法家イブン・サッラージュの '*Uṣūl* にみられる学派間の意見の相違を検証することによって、彼の師ムバッラドの時代や、さらにそれ以前に存在したと

50) '*Inṣāf* I, 6.

51) '*Inṣāf* I, 17.

52) '*Inṣāf* I, 97; '*Uṣūl* I, 111.

53) '*Inṣāf* I, 235; '*Uṣūl* I, 122, 159.

54) *rākib-an ḡā'a zayd-un* のようにハールの *rākib-an* が文頭に置かれる例。'*Inṣāf* I, 250; '*Uṣūl* I, 215.

55) '*Inṣāf* I, 51; '*Uṣūl* I, 204.

される「バスラ」と「クーファ」の文法家らの間の論争について、その信憑性について考察した。その結果、'Uṣūl にみられる記述には、ヴァイルの説の根幹をなす「9世紀末より前には、バスラ学派もクーファ学派も存在しない」という点を補強する材料となるものが多く得られた。

'Uṣūl で使用される文法用語に、バスラの要素とクーファの要素が混在しているという事実は、両学派が対立する中で、他方の見解を論駁、排除しようという構図とは相容れないものであると考えられる。

文法に関する意見の相違についても、'Uṣūl で記されていることは、「バスラ」「クーファ」の対立というよりは、各文法家の見解の相違であって、「バスラの人々」とクーファを代表する学者であるファッラーが同一の見解であると躊躇せずに記述している。また、師ムバッラドの論敵であったとされるサアラブに関する記述が好意的であるのに加え、自分自身の論敵を想定している箇所が皆無である。

このように「バスラ」「クーファ」に対して客観的、中立的なスタンスや、見解の相違が個人攻撃に至るような部分がみられないという事実は、イブン・サッラージュが 'Uṣūl を著すにあたって「学派」ごとに異なる意見対立を描き、自らの学派の見解を支持することが趣意ではなかったことを示すのではないだろうか。

また、ヴァイルの説の一つ、「ムバッラドの後の世代による作り話」に関しては、イブン・アンバーリー著 'Inṣāf との対比から、'Uṣūl には、アラビア語に関する基本的な事柄に関する意見対立が触れられないことが多く、周辺の文法事項に関わるものが多数をしめることがわかった。10世紀以降、誰がどのような形で過去の学派間の対立を明確にさせていったのかの検証は、今後に残された課題であるが、少なくともイブン・サッラージュが中心的な役割を果たしたとは言えないことだけは、'Uṣūl の分析から断定してよいだろう。

[アラビア語転写方式]

(ي و ه ن م ل ك ق ف غ ع ظ ط ض ص ش س ز ر ذ د خ ح ج ث ت ب ء)
(' b t t ġ ḥ ḥ d d r z s š š ḍ ṭ z ' ġ f q k l m n h w y)

[参考文献]

[アラビア語原典]

- 'Abū at-Tayyib, *Marātib* = 'Abū at-Tayyib 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Alī. *Marātib an-Naḥwiyyin*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1974.
al-Farrā', *Ma'ānī* = 'Abū Zakariyyā' Yaḥyā ibn Ziyād. *Ma'ānī al-Qur'ān*. Ed. by Muḥammad 'Alī an-Naḡḡār. 3 vols. al-Qāhira: Dār as-Surūr, n.d.
Ibn al-'Anbārī, 'Inṣāf = 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *al-'Inṣāf fī Masā'il al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyin al-Baṣriyyin wa al-Kūfiyyin*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Ḥamid. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Fikr, 1982.

- Ibn al-'Anbārī, *Nuzha* = 'Abū al-Barakāt 'Abd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *Nuzhat al-'Alibbā' fī Ṭabaqāt al-'Udabā'*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1998.
- Ibn Ğinnī, *Ḥaṣā'is* = 'Abū al-Faḥr 'Uṭmān. *al-Ḥaṣā'is*. Ed. by Muḥammad 'Alī an-Nağğār. 3 vols. al-Qāhira 1952-56. (Repr., Bayrūt: Dār al-Kitāb al-'Arabī, n.d.)
- Ibn Ḥallikān, *Wafayāt* = Šams ad-Dīn 'Aḥmad ibn Muḥammad. *Wafayāt al-'A'yān wa 'Anbā' 'Abnā' az-Zamān*. Ed. by 'Iḥsān 'Abbās. 7 vols. Bayrūt: Dār at-Taḳāfa, n.d.
- Ibn an-Nadīm, *Fihrist* = 'Abū al-Farağ Muḥammad ibn 'Abī Ya'qūb 'Ishāq al-Warrāq. *Kitāb al-Fihrist*. Ed. by Riḍā Tağaddud ibn 'Alī ibn Zayn al-'Ābidīn al-Ḥā'irī al-Mazdarānī. Bayrūt: Dār al-Ma'arifa, 1978.
- Ibn as-Sarrāğ, *'Uṣūl* = 'Abū Bakr ibn as-Sarī. *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatī. Bayrūt: Mu'assasat ar-Risāla, 1985.
- Ibn Wallād, *'Intiṣār* = 'Abū al-'Abbās 'Aḥmad ibn Muḥammad. *Kitāb al-'Intiṣār*. Ed. by Zuhayr 'Abd al-Muḥsin Ṣultān. Bayrūt: Mu'assasat ar-Risāla, 1996.
- Ibn Ya'īs, *Šarḥ* = Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Mubarrad, *Kāmil* = 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Kāmil fī al-Luğā wa al-'Adab*. Ed. by 'Abd al-Ḥamīd 'Aḥmad Yūsuf Hindāwī. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1996.
- al-Mubarrad, *Muṭaḍḍab* = 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Muṭaḍḍab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Ḥāliq 'Uḍayma. 4 vols. Bayrūt, 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Qifṭī, *'Inbāḥ* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū al-Ḥasan 'Alī ibn Yūsuf. *'Inbāḥ ar-Ruwāt 'alā 'Anbāḥ an-Nuḥāt*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 4 vols. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1986.
- Sībawayhi, *Kitāb* = 'Abū Bišr 'Amr ibn 'Uṭmān. *al-Kitāb*. (*Le livre de Sībawaihi*) éd. par Hartwig Derenbourg. 2 vols. Paris, 1881-1889 [réimpr. Hildesheim, 1970]
- as-Sirāfī, *'Aḥbār* = 'Abū Sa'īd al-Ḥasan ibn 'Abdullāh. *'Aḥbār an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn*. Ed. by Fritz Krenkow. Paris: Paul Geuthner and Beirut: Imprimerie Catholique, 1936.
- as-Suyūṭī, *Buğya* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Buğya al-Wu'āt fī Ṭabaqāt al-Luğawiyyīn wa an-Nuḥāt*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 2 vols. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, n.d.
- as-Suyūṭī, *Ham'* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Ham' al-Hawāmi' fī Šarḥ Ġam' al-Ġawāmi'*. Ed. by 'Aḥmad Šams ad-Dīn. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1988.
- Ta'lab, *Mağālis* = 'Abū al-'Abbās 'Aḥmad ibn Yaḥyā. *Mağālis Ta'lab*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. 2 vols. Cairo: Dār al-Ma'ārif, n.d.
- Yāqūt, *Mu'ğam* = Šihāb ad-Dīn 'Abū 'Abdullāh Yāqūt ibn 'Abdullāh ar-Rūmī al-Ḥamawī al-Bağdādī. *Mu'ğam al-'Udabā'*. 5 Vols. Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, Bayrūt, 1991.
- az-Zağğāğ, *Mā yanṣarif* = 'Abū 'Ishāq 'Ibrāhīm ibn as-Sarī. *Mā yanṣarif wa mā lā yanṣarif*. Ed. by Hudā Maḥmūd Qarā'a. al-Qāhira: Maktabat al-Ḥānğī, 2000.
- az-Zağğāğī, *'Amālī* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *'Amālī az-Zağğāğī*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. Bayrūt: Dār al-Ğīl, 1987.
- az-Zağğāğī, *Ġumal* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-Ġumal*. Éd. par Mohammed Ben Cheneb. Paris: Klincksieck, 1957.
- az-Zağğāğī, *'Idāḥ* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-'Idāḥ fī 'Ilal an-Naḥw*. Ed. by Māzin al-Mubārak. al-Qāhira: Dār an-Nafā'is, 1996.
- az-Zağğāğī, *Mağālis* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *Mağālis al-'Ulamā'*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. al-Qāhira: Maktabat al-Ḥānğī, 1983.
- az-Zubaydī, *Ṭabaqāt* = 'Abū Bakr Muḥammad ibn al-Ḥasan. *Ṭabaqāt an-Naḥwiyyīn wa al-Luğawiyyīn*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif, n.d.

[二次資料]

- Baalbaki, R. (1981) "Arab grammatical Controversies and the extant Sources of the second and the third Centuries A. H." *Studia Arabica et Islamica. Festschrift for Iḥsān 'Abbās on his Sixtieth Birthday*, ed. by Wadād al-Qāḍī, 1–26. Beirut: American University of Beirut.
- Bernards, M. (1997) *Changing Traditions. Al-Mubarrad's Refutation of Sibawayh and the Subsequent Reception of the Kitāb*. Leiden: E. J. Brill.
- Bernards, M. (2005) "Medieval Muslim Scholarship and Social Network Analysis: A Study of the Basra / Kufa Dichotomy in Arabic Grammar". in: Sebastian Günther ed. *Ideas, Images, and Methods of Portrayal. Insights into Classical Arabic Literature and Islam*. Leiden, Brill, pp. 129-40.
- Blau, J. (1963) "The Role of the Bedouins as Arbiters in linguistic Questions and the Mas'ala az-Zunburiyya". *Journal of Semitic Studies* 8, pp. 42-51.
- Carter, M.G. (1973) "Ṣarf et ḥilāf, Contribution à l'histoire de la grammaire arabe". *Arabica* XX pp. 292–304.
- Carter, M. G. (1981) *Arab Linguistics. An Introductory Classical Text with Translation and Notes*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Carter, M.G. (1994) "Writing the History of the Arabic Grammar". *Historiographia linguistica* 21, pp. 387-416.
- Carter, M.G. (1999) "The Struggle for Authority: A re-examination of the Baṣran and Kūfan Debate". *Tradition and Innovation: Norm and Deviation in Arabic and Semitic Linguistics*. ed. by Lutz Edzard & Mohammed Nekroumi, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 55–70.
- Carter, M.G. (2000) "The Development of Arabic Linguistics after Sibawayhi: Baṣra, Kūfa and Baghdad". in: Sylvain Auroux et al., eds., *History of the Language Sciences*. Berlin, pp. 263–72.
- Carter, M.G. (2004) *Sibawayhi*. Oxford University Press.
- Dayf, Š. (1968) *Al-Madāris an-Naḥwiyya*. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.
- Fleisch, H. (1957) "Esquisse d'un historique de la grammaire arabe". *Arabica*, IV pp.1-20.
- Flügel, G. (1862) *Die grammatischen Schulen der Araber*. Erste Abtheilung. Die Schulen von Basra und Kufa und die gemischte Schule. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Goldziher, I. (1994) *On the History of Grammar among the Arabs*. Transl. by Kinga Dévényi and Tamás Iványi. Amsterdam: Benjamins.
- al-Maḥzūmī, M. (1958) *Madrasat al-Kūfa wa Manḥaḡu-hā fī Dirāsāt al-Luḡa wa an-Naḥw*. 3rd edition. Bayrūt: Dār ar-Rā'id al-'Arabī.
- Owens, J. (1990) *Early Arabic Grammatical Theory. Heterogeneity and Standardization*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. (1991) "Models for Interpreting the Development of Medieval Arabic Grammatical Theory". *Journal of the American Oriental Society*. Vol. 111. Number 2. pp. 225–238.
- Peled, Y. (1999) "Aspects of the Use of Grammatical Terminology in Medieval Arabic Grammatical Tradition". In: Yasef Suleiman ed. *Arabic Grammar and Linguistics*. Curzon. pp. 225-38.
- as-Sāmarrā'i, I. (1987) *al-Madāris an-Naḥwiyya. 'Uṣṭūra wa Wāqī'*. 'Ammān: Dār al-Fikr.
- Šabra, M. Ḥ. (2001) *Tamarat al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn*. al-Qāhira: Dār Ġarīb.
- Talmon, R. (1985) "An Eighth-century Grammatical School in Medina: the Collection and Evaluation of the available Material". *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 48, pp. 224-36.
- Talmon, R. (1986) "al-Mas'ala az-Zunburiyya. Dirāsa fī Māhiyyat 'Iḥtilāf al-Maḡhabayn an-Naḥwiyyayn". *Al-Karmil* 7, pp. 131-63.

- Talmon, R. (2003) *Eighth-Century Iraqi Grammar: A Critical Exploration of Pre-Ḥalilian Arabic Linguistics*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Troupeau, G. (1962) “La grammaire à Baḡdād du IX^e au XIII^e siècle”. *Arabica. Volume spécial. Publie à l’occasion du mille deux centi me anniversaire de la fondation de Baḡdād*. pp.397-405.
- Versteegh, C. H. M. (1977) *Greek Elements in Arabic Linguistic Thinking*. Leiden: E. J. Brill.
- Versteegh, C. H. M. (1989) “A Sociological View of the Arab Grammatical Tradition: Grammarians and their Professions”. In: Paul Wexler, Alexander Borg and Sasson Somekh, *Studia linguistica et orientalia memoriae Haim Blanc dedicata*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 289-302.
- Versteegh, C. H. M. (1993) *Arabic Grammar and Qur’ānic Exegesis in Early Islam*. Leiden: E. J. Brill.
- Versteegh, C. H. M. (1995) *The Explanation of Linguistic Causes. Az-Zaḡḡāḡi’s Theory of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Weil, G. (1913) *Die grammatischen Fragen der Basrer und Kufer*. Leiden: E. J. Brill.
- Yāsīn, M. Ḥ. (1980) *ad-Dirāsāt al-Luḡawiyya ‘inda al-‘Arab ‘ilā Nihāyat al-Qarn at-Tālī*. Bayrūt: Dār Maktabat al-Ḥayāt.
- Yūsuf, M. I. (2000) *al-Ġuhūd al-Luḡawiyya li-Ibn as-Sarrāḡ. Dirāsa Taḥlīliyya*. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣrī.
- 池田修 (1970) 「9世紀以前のアラビア語研究」『オリエント』11巻3/4号 pp.121-160.
- 池田修 (1972) 「文法学派と都市」『イスラム化に関する共同研究報告5』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.173-209.
- 池田修 (1982) 「バスラ学派とクーファ学派」杉勇・前嶋信次他編『オリエント史講座4 カリフの世界』学生社, pp.124-140.
- 岡崎英樹 (2003) 「アラブ伝統文法における maf’ūl の下位範疇——イブン・アッサッラージの分類とそれ以降の変遷——」『関西アラブ・イスラム研究』3, pp.15-32.
- 岡崎英樹 (2008) 「アラブ文法学における『学派』とマスダル maṣḍar の位置づけ」『アラブ・イスラム研究』6, pp.29-44.
- 内記良一 (1968) 「クーファ派文法学の格概念について」『東京外国語大学論集』17, pp.65-82